

「異質なものの表現」としての翻訳

近代ドイツ翻訳論にみられる翻訳の諸問題

濱田 真

はじめに

翻訳の問題は、日本でもさまざまな観点から活発に論じられている。個別の文学作品の翻訳や翻訳の際の実践的な知識について論じるもの、翻訳語の成立事情を歴史的に考察するもの、翻訳のあり方を理論的に分析するもの、さらには翻訳行為を文化レベルにまで拡大して論じるものなど、さまざまな領域で多様な形を認めることができる¹。翻訳とは、異なる言語が会う場で生まれるのであって、グローバル化の動きが進み異文化間の接触が増大すればするほど、他言語を母語に移し母語を他言語に移す際の諸問題が意識されることになるのは当然の趨勢とも言えるだろう。グローバル化が急速に進行している現在において、翻訳の営みはますますその重要性を増しているように思われる。

現代社会において避けることのできない翻訳行為の意味を考える際の手がかりとして、本稿では近代ドイツの翻訳論に注目したい。18世紀後半から19世紀前半は、ドイツでは徐々にナショナリズムの議論が盛んになると同時に異文化への関心が高まり、いわゆる多文化主義的な問題が論じられるようになる時代である。ナショナリズムと多文化主義は接点を持たないように見えるが、両者は他者理解の問題と深く関わっているという点で、表裏一体の関係にあると言ってよい。そしてそれは、思想的には解釈学の問題に接続する。解釈学とは文字通り解釈のあり方を論じるものだが、異質な文化や社会をどう解釈し、それにどう向き合うべきかという問題が身近なものとして人々の注意を惹くのに応じて、それまでの神学や法学といった個別専門分野に限定されて

¹ 柴田元幸『翻訳教室』（新書館、2006年）、平子義雄『翻訳の原理—異文化をどう訳すか』（大修館書店、2008年）、柳父章『翻訳語成立事情』（岩波新書、1982年）、大橋良介編『文化の翻訳可能性』（人文書院、1993年）など。

いた特殊解釈学が、「談話 Rede」を中心にした理解の問題を扱う解釈学へと拡大される必要性が意識されることになる。19 世紀前半のシュライアーマッハーによる「一般解釈学」の学問的体系化の構想は、このことを象徴している。

異文化理解の問題は、理解するとはそもそもどうということかという原理的な議論にまで遡るが、具体的には外国語を母語に置き換える際の翻訳の問題として論じられる。それは個別の言語間の翻訳技術の議論を超えて、解釈学の問題と結びついていけば翻訳理論と呼ぶことのできる形でも展開していく。ヘルダーの『民謡』(1778/79)の序論、ノヴァーリスの断章集『花粉』(1798)中の翻訳論、A. W. シュレーゲルの「ヴィーン講演」(1809-1811)、シュライアーマッハーの「翻訳のさまざまな方法について」(1813)、W. v. フンボルトの「アガムムノン翻訳への序論」(1816)、ゲーテの『西東詩集 注解と論考』(1816-19)中の翻訳論などは、個別の翻訳技術論を超えた一般的な翻訳理論として位置づけることができる²。

以下では、これらの翻訳論のなかからいくつかを取り上げて、18 世紀後半から 19 世紀前半のドイツにおいて翻訳の問題が異文化・他者理解の問題とどのように結びついて論じられているのかを探り、翻訳行為の持つ問題点と可能性について考えいくことにしたい³。

1. 翻訳の正確さ

1.1. 「客観的事柄の伝達」と「主観の表現」

翻訳について論じる際にしばしば取り上げられるものに、正しい翻訳とはどういうも

² Vgl. Friedmar Apel/Annette Kopetzki: *Literarische Übersetzung*. 2., vollständig neu bearbeitete Auflage. Stuttgart 2003.

³ 近現代ドイツの翻訳論の流れを思想的に考察した研究としては、三ツ木道夫『翻訳の思想史 — 近現代ドイツの翻訳論研究』(見洋書房、2011 年)を挙げることができる。ヘルダーの翻訳論についての言及はないが、シュライアーマッハー、W. v. フンボルトからベンヤミンにいたるまでのドイツの翻訳論についての綿密な考察がなされている。また、アントワーヌ・ベルマン『他者という試練 ロマン主義ドイツの文化と翻訳』(藤田省一訳、みすず書房、2008 年)では、主としてドイツ・ロマン主義時代の翻訳論がビルドゥング論との関係から詳細に論じられている。本稿執筆にあたって、多くを参照した。

のか、翻訳の正確さとは何かという問題がある。この問題にどのように答えることができるだろうか。ここでは、シュライアーマッハーがベルリン王立科学アカデミーで1813年に行った講義「翻訳のさまざまな方法について」⁴に注目し、彼の議論を手がかりにしてこの点について考えていきたい⁵。

シュライアーマッハーは自らの翻訳論を展開するにあたって、翻訳を二つのタイプに区分している。純粹に客観的な事柄の伝達が問題とされる領域での翻訳⁶と個人の独自の物の見方や感じ方、いわば主観的な物の捉え方が表現される領域での翻訳である。シュライアーマッハーによれば事実経過の記述を他の言語に移し替えていく翻訳、つまり新聞記事や商取引上のやり取りなどの翻訳が前者のタイプに入り、対象が客観的に規定されるというよりは言語を通じて初めて対象が生成する領域、つまり詩、文学、哲学などの学芸の領域での翻訳が後者のタイプに入るとされる。

前者の場合には客観的な事柄が問題となるので、両方の言語に関して適切な知識を備え、扱われている事柄について十分な理解があれば、翻訳は合理的かつ機械的に行うことができる。そして、対象になっている事柄が正確に伝達されているかどうかを基準にすれば、その翻訳が正しいかどうかは比較的明確に判断することも可能になる。その際たとえ両言語間に完全な等価性が見られなくても、扱う事柄自体が言語の差異を解消し、言語の相違を補ってくれることになる。シュライアーマッハーは「事柄自体がすべてを調停してくれる」(42)と述べて、言語の相違が事柄の客観性によって克服される点を強調している。

⁴ シュライアーマッハーからの引用は以下に依り、当該ページ数をカッコ内に表示する。Friedrich Schleiermacher: Ueber die verschiedenen Methoden des Uebersetzens [sic]. In: *Das Problem des Übersetzens*. Hrsg. von Hans Joachim Störig. Darmstadt 1963. 日本語訳としては、フリードリヒ・シュライアーマッハー「翻訳のさまざまな方法について」(三ツ木道夫編訳『思想としての翻訳——ゲーテからベンヤミン、ブロッホまで』白水社、2008年、所収)を参照し、訳文は必要に応じて変更した。

⁵ シュライアーマッハーの翻訳論については、三ツ木道夫『翻訳の思想史』において綿密な考察がなされており、多くの示唆を受けた。『翻訳の思想史』では19世紀から20世紀にいたる翻訳論の流れのなかでシュライアーマッハーが論じられるが、本稿では、18世紀翻訳論と関連づけて考察を進める。

⁶ シュライアーマッハーはこの種の翻訳を「通訳」と呼んでいるが、ここでは広く翻訳として考察する。

これに対して後者のタイプでは、語る主体が客観的な事柄の背後に退くのではなく、前面に現れてくる領域が問題となる。言説が目の前の対象や外的な事実完全に拘束されているわけではない場合、つまり外的な客観的事柄というよりは個人の主観的な思想、感情、物の見方・感じ方がその個人固有の表現や言い回しにおいて語られる場合である。ここでは、翻訳することとその個人を理解することが深く結びついているので、正しい個人の理解が簡単ではないのと同様に、翻訳の正確さの判断の基準を明確に設定することは難しい⁷。

1.2. 「伝達手段」としての言語と「世界観の表出」としての言語

さて、このようなシュライアーマッハーの分け方は、さらに推し進めれば、言語についての二つの捉え方のタイプに行き着くだろう。つまり、事柄を伝える純粋な手段・道具として言語を見る立場と、言語を単なる伝達手段と見なすのではなく、それぞれの言語がそれを母語とする人々の文化や社会固有の物の見方・価値観と分かちがたく関わっているとする立場である。前者においては、伝達内容は言語と切り離されてすでに独立して存在し、それが言語という媒体によって伝えられるとされる。そこには、内容が予め存在し、それを道具としての言語によって伝達するという図式が認められる。後者の立場では、個人の考えや思想はあくまでも言語を通して、言語の中で生まれるとされる。個人の考え方・感じ方と言語とは不即不離のものであり、言語と思考・感情との相互影響関係に注意が払われる。

単純化を恐れずに言えば、18世紀前半から半ばにかけては前者の立場の言語観が支配的で、後者の言語観は18世紀後半から19世紀にかけて徐々に意識されてきたと見てよい。例えばヘルダーは、言語はそれを母語とする人々の生活環境全般、つまり歴史、風土、感性、習慣と分かちがたく結びついており、言語を理解することは

⁷ このようなシュライアーマッハーの見方は、もちろん現代の視点からは単純すぎるように映るかもしれない。現代の翻訳論では、コードの制約の大きい順に、自然科学用語、法律用語、日常語、文学の言葉という形に分類して論じられている(平子、前掲書、145 ページ以下参照)。しかしここでのシュライアーマッハーの意図は、バルマンも指摘しているように(バルマン、前掲書、295 ページ以下参照)、基本的に文学の翻訳のあり方を考察する点に置かれており、それに該当しない領域を除外する論じ方をしている点は踏まえておくべきであろう。

同時に文化を理解することだとして、文化多元主義的視点から言語を考察する必要性を主張している。また W. v. フンボルトは、言語にはそれを母語とする人々の世界観が反映されているとし、言語を単なる記号と見なすのではなく、言語に自らを形成する力を認める言語有機体論的立場を表明している。シュライアーマッハーも、言語と思考とは密接に関係するとして、「人間は言語の中に生まれ、言語の中で育まれ、知性も空想も言語に拘束されている」(43)と述べている。

2. 言語の二重性 — 言語の規則性とその変容

シュライアーマッハーの翻訳論と解釈学において重要な位置を占めるのは、言語の「二重性 Duplizität」についての議論であろう。個人の言語は母語という既成の言語体系に依拠している。この一般的な言語体系に媒介されているからこそ相互コミュニケーションが可能になる。しかし個々人の言語行為は言語体系・言語規則に制約され依存すると同時に、その言語体系は個々人の言語使用によって「変容 Modifikation」を受ける⁸。つまり個人は言語体系の内に受動的に置かれていると同時に、個人の創造的言語使用を通してその言語体系に能動的に働きかけることができる。個人の言語行為が言語体系を新しく更新し変容させる契機となりうるものとして、時代を経てもなお残る詩、文学、哲学の言説が挙げられている。このような個人の創造的言語行為と既成の言語体系との間の複雑な拮抗関係のなかで生まれる言語作品を理解するには、シュライアーマッハーによれば、その民族の歴史および生活を十分に知ると同時に、個々の作品の原作者を生き生きと理解する必要がある。シュライアーマッハーの解釈学では、これが文法的解釈と心理的解釈と呼ばれるものに対応するわけだが、この二つの解釈方法は必ずしも補い合うことにはならずお互いに対立し合う側面を持っており、そこに解釈学の永遠に終わらない課題が認められる⁹。

⁸ シュライアーマッハーの解釈学についての議論については、麻生建『解釈学』（世界書院、1985年）109ページ以下を参照。Vgl. Fr. D. E. Schleiermacher: *Hermeneutik. Nach den Handschriften neu herausgegeben und eingeleitet von Heinz Kimmerle. Zweite, verbesserte und erweiterte Auflage. Heidelberg 1974.*

⁹ 麻生建、前掲書、120ページ以下。その他、シュライアーマッハーの解釈学については、山脇直司「シュライエルマッハーの哲学思想と学問体系」(『講座 ドイツ観念論 第四巻 自然と自

さて、仮に翻訳者がこのような二重性において文芸作品を十分に理解しえたとして、それを著者の言語とは異質の読者の言語で表現することがはたして可能なのだろうか。規範化と変容の二重構造は、翻訳先の言語においても固有な形で存在するわけなので、翻訳の際には翻訳元と翻訳先の二つの言語においてこの二重構造が踏まえられていなければならない。したがってシュライアーマッハーが翻訳とは「愚かな企て」(45)だと言い切るのにはもっともな理由があるように思われる。文芸の領域での翻訳は、客観的事柄が言語の差異を補う場合とは違って、正しい翻訳を定義することがきわめて困難なのであり、翻訳の正確さを明確に定めようとする事自体が、翻訳のあり方に逆行することにもつながる。

3. 同化的翻訳と異化的翻訳

ではそのような翻訳において、どのようなあり方が考えられるだろうか。ここでシュライアーマッハーは翻訳のふたつのタイプを提示する。つまり、「作家をできるだけそっとしておいて読者の方を作家に向けて動かす」(47)方向と、「読者の方をできるだけそっとしておいて作家を読者に向けて動かす」(47)方向である。ここで言われている前者のタイプは、いわゆる異化的翻訳、原典に忠実な翻訳、起点言語重視の翻訳と呼べるものであり、後者のタイプは、同化的翻訳、読者中心の自由な翻訳、目標言語重視の翻訳と言える¹⁰。

この二つのタイプが翻訳のあり方の基本型で、翻訳者はつねにこの両極を意識しながら翻訳作業を進めていかなければならないのであって、どちらがあるべき翻訳の姿なのかはそう簡単に結論できない問題だろう。しかし興味深いのは、シュライアーマッハーが同化的翻訳を断固として退けていることである。パラフレーズや翻案は言うに及ばず、「著者自身があたかもドイツ語で書いていたかのように訳す」(48)翻訳を、本来の翻訳の姿ではないときっぱりと拒絶している。これは何を意味しているのだろうか。

由の深淵」、弘文堂、1990年所収、217～258ページ）、ヴォルフガング・H・ブレーガー『シュライアーマッハーの哲学』（増渕幸男訳、玉川大学出版部、1998年）、安酸敏真『歴史と解釈学——「ベルリン精神」の系譜学』（知泉書館、2012年）を参照。

¹⁰ 三ツ木、前掲書、55ページ以下、平子、前掲書、28ページ以下参照。

シュライアーマッハーは、翻訳に際して「異質なものが表現されねばならない」(56)と述べ、言語は「異質なものともっとも多くの面で接触することによってのみ生き生きと成長し、固有の力を十全に展開できる」(69)と主張する。ここでは「異質なものに対する敬意」(69)という言葉が使われるが、このような見方は、シュライアーマッハーがベルリンアカデミーで歴史・文献学部門に属していたということ、つまり古典文献学の研究に携わって長らくプラトンの対話編の翻訳に従事し、対話の非対称性という解釈学的問題に関心を持っていたということと無関係ではない。また、自文化中心主義と映った当時のフランスへのアンチテーゼという側面もあるだろう。さらに、異質なものを通しての自己拡張、他者を通してのより深い自己認識というロマン主義時代にしばしば語られた世界観、ノヴァーリス、A. W. シュレーゲル、W. v. フンボルトらの思想との共通性を認めることもできる。

興味深いのは、このようなシュライアーマッハーの異質性重視の立場と正反対の立場を主張する動きも、19世紀ドイツでは見られるということだ。1807年にベルリンで行われたフィヒテの講演『ドイツ国民に告ぐ』の第4講演ではドイツ語の特質が論じられているが、そこではドイツ語の純粋さが強調され、他のゲルマン語のように外国語を取り入れて自らの言語を変容させる場合には、言語は生命を失い進歩することはないと断じられている。フィヒテは、ドイツ語のなかにラテン語のような外来語を人工的に持ち込んで、賞賛すべきもののように見せかけるならば、ドイツ語本来の特性が失われてしまうと述べている。フィヒテも言語の持つ形成力に目を向けるのだが、外国の言葉を取り込むことではなく、深く自文化固有の感性を掘り下げていくことによって言語は生成発展するとしている¹¹。

ニーチェの翻訳論は別途論じるべきテーマだが、ニーチェも翻訳について異化的翻訳ではなくむしろ同化的翻訳の必要性を説いている。19世紀後半には、歴史上のあらゆる時代に等しく関心を寄せてそれぞれの時代固有の価値を相対主義的に論じるいわゆる歴史主義の動きが起こる。ニーチェは歴史主義的な見方に縛られている人々や硬直した文献学に従事する学者に対して厳しい批判の目を向けるが、その理

¹¹ Johann Gottlieb Fichte: Reden an die deutsche Nation. In: *J. G. Fichte. Gesamtausgabe*. Hrsg. von R. Lauth, E. Fuchs, P. K. Schneider u. a. unter Mitwirkung von J. Beeler-Port. Stuttgart 2005. Bd. I-10, S. 143ff.

由は、過去の時代の状態にだけ関心を持ち、現在との関わりで過去を捉える力が欠乏しているからだとされる。異質な過去を積極的に現在に生かす力を取り戻すために、ニーチェはむしろ同化的翻訳の重要性を説くが、それは逆説的には当時のドイツへの批判、自文化批判という意味が込められていることは注意しなければならない¹²。

このように見てくると、異化的翻訳か同化的翻訳かという問題は、翻訳がなされるそのつどの文化・社会・時代状況と密接に関わって多様な様相を呈しており、二者択一的な議論ではなくて、論じられる文脈を視野に入れた検証が必要だろう。

4. 翻訳の音色

異化的翻訳対同化的翻訳とは別な角度から翻訳のあり方を考えるものとしては、翻訳の音色についての議論を挙げることができる。翻訳の響きや色合いという点をはつきりと意識していたのはヘルダーである。

ロマン主義の民謡観にも大きな影響を与えたヘルダーの『民謡』(Volkslieder)は1778/79年に出版されたが、そこではさまざまな国や地域の民謡がドイツ語に翻訳されており、翻訳のあり方についても論じられていて翻訳論として重要な意味を持っている。ヘルダーによれば、詩歌は音程や拍子やリズムによって固有の旋律を持ち、音調や転調をとおして特有の気分を表す。啓蒙主義時代には、ダランベール、オイラーに見られるような音の機械的数学的分析が主流となりつつあった。ヘルダーは、そのような音響学的視点に対して、「音色 Ton」という概念で、「歌としてわたしたちの心に流れ込んでくる曖昧で名づけることが難しいすべてのもの」¹³を捉えようとしている。これは作品の色合いや香りとも呼ばれるが、日本語の「調べ」という言葉と類似している部分も多い。W. v. フンボルトもヘルダーの「音色」とほぼ同じことをリズムという言葉で

¹² Vgl. Friedrich Nietzsche: *Unzeitgemäße Betrachtungen. Zweites Stück. Vom Nutzen und Nachtheil der Historie für das Leben*. In: *Kritische Studienausgabe in 15 Bänden*. Hrsg. von G. Colli und M. Montinari. München 1999. Bd. 1, S. 245ff.

¹³ Johann Gottfried Herder: *Werke in zehn Bänden*. Hrsg. von Martin Bollacher, Ulrich Gaier, Hans Dietrich Irmischer u.a. Frankfurt a. M. 1985-2000. Bd. II, S. 451. 以下、ヘルダーからの引用はフランクフルト版に依り、略号 FA を用い、ローマ数字で巻数をアラビア数字でページ数を表示する。

語っている。フンボルトによればリズムとは「感覚や感情のうねりを仄かに描き出し」、魂のもっとも深い部分に触れるものだとされる¹⁴。また、ニーチェは「ハトスの内的な緊張」¹⁵として文体の「速度 **Tempo**」¹⁶という言葉を用いるが、ヘルダーの「音色」はそれとも関係している。

音色をどのように翻訳するかという問題は、技術的な議論とも関わってくるので詳しく立ち入ることはできないが、ここではヘルダーの次の言葉に注目しよう。

翻訳においてこの音、つまり外国語の歌の響き(*Gesangton einer fremden Sprache*)を移すことが最も難しい。われわれの言語という岸辺や外国語という岸辺で数多くの歌や抒情詩という船が座礁しているように。たとえ不可能だとしても、その言語のなかで響き出すように歌そのものを示すこと、歌がわれわれの内でも響き出る様子を忠実に捉えること、これ意外に方法はない。(FA III, 247f.)

ここで論じられているのは、言語で説明しようとするか逃れ去っていく微妙で説明しがたい感覚的な色合いとも呼べるものを、どう翻訳するかという問題である。言葉から言葉への翻訳だけでなく、感覚的なものの翻訳可能性に目が向けられている。ヘルダーはこのような音色の翻訳を「後誦 *Nachgesang*」と呼んでいるが¹⁷、ここで興味深いのは、原典の音色を完全に移すことは不可能でも、原典が受容者の内で反響して響き出るその有様を描写することに、翻訳の進むべき方向が見出されていることである。音色の共鳴・共振という問題は感性論とも関わるが、このような論点は、意味内容の伝達を中心にした翻訳とは別種の翻訳のあり方について考える際のヒントを与えてくれる。

ゲーテは『西東詩集 注解と論考』中の翻訳論において、ヴィーラントによるシェイクスピアの散文訳を翻訳のひとつのあり方として評価している。それに対してヘルダー

¹⁴ Wilhelm von Humboldt: Einleitung zu „Agamemnon“. In: *Das Problem des Übersetzens*. Hrsg. von Hans-Joachim Störig. Darmstadt 1963, S. 86.

¹⁵ Friedrich Nietzsche: *Ecce homo*. In: *Kritische Studienausgabe in 15 Bänden*. Bd. 6, S. 304.

¹⁶ Friedrich Nietzsche: *Jenseits von Gut und Böse*. In: *Kritische Studienausgabe in 15 Bänden*. Bd. 5, S. 46.

¹⁷ Vgl. Rüdiger Singer: „*Nachgesang*“. *Ein Konzept Herders, entwickelt an Ossian der popular ballad und der frühen Kunstballade*. Würzburg 2006, S. 78ff.

はヴィーラントを批判して次のような疑問を投げかけている。「シェイクスピアや、このような英国の詩文集にある古代歌謡のひとつを取り出し、そこから音調や韻や語の配列や旋律の目立たない流れとかの抒情的な要素のすべてを取り去って、要するに詩に意味だけを与えて、どのようにでも別な言語に翻訳してみるがよい。」(FA II, 449) 翻訳不可能論とも受け取れる反語疑問だが、すでに見たようにヘルダーの言語論では言葉と意味とは密接不可分の関係に置かれているので、意味だけを抜き出した翻訳は批判されることになる。しかしその一方で内容を度外視して形式的・機械的にリズムだけを当てはめる翻訳に対してもヘルダーは批判の目を向けている。1773年に出版された『オシアンおよび古代諸民族の歌謡に関する書簡からの抜粋』では、古代ケルトのオシアンの歌が高く評価されるが、その際ミヒャエル・デニスによるオシアンのドイツ語訳が批判される。デニスは翻訳の際にヘクサーメーターを採用したが、ヘルダーにとっては、たとえそれが当時クroppシュトック的なものとして一般に受け入れやすいリズムだったとしても、ダクテュルスとアナペーストが混在し平衡法や頭韻も見られるようなオシアン固有のリズムにヘクサーメーターを当てはめることは、オシアンにいわば古代ギリシアの衣装を着せることになるのであって、オシアン本来の主要な音色が奪われてしまうと映った。いかにリズムを重視しようとも、それが形式主義的になり原詩固有の音色を損なうならば、批判の対象となるべきものだった。

音色を中心にしたヘルダーの翻訳論において興味深いのは、彼が翻訳という行為を、読むことから聞くことへ、聞くことから書くことへという段階で考えていることである。ヘルダーの『民謡』は、庶民が口ずさむ歌を直接書き留めたものではなく、すでに書きつけられているが人目につくことのなかったさまざまな地方や国の歌謡を集めたものだった。彼によれば、すでに文字化されている歌謡は、第一にそれが歌われているかのように、つまり本来の音調が響き出るように読まれなければならない。そこでは文字を音声へと変換するプロセスが求められている。次いで、音として感知された歌謡は母語の文字へと書き写されるが、その際それは聴かれるように読まれることを念頭に置いたものでなければならない。ここでは三重の変換が考えられている。翻訳者は自らの内面で原詩の文字を音に変え、その音を母語の文字に変えるのだが、その文字は読者によってさらに音へと変換されることが要求されている。読者はそれによってはじめて「聴き、考え、感じる」ことができるとされる。

18 世紀のドイツは読書について大きな変化が起こった時代だった。長期にわたる宗教戦争のために出版文化が著しく衰退した 17 世紀に対して、この世紀には印刷技術の改良や出版業者のネットワークの拡大などによってドイツ語による書籍の出版数が飛躍的に増大し、書物はもはや一部の特権階級の専有物ではなくなった。読書が社会現象として人々の関心を惹き、さまざまな領域で読書の持つ意味について論じられるようになったのもこの時期のことであり、それは当時「読書熱 *Lesewut*」、「読書癖 *Lesesucht*」、「多読 *Vielleserei*」といった読書行為の価値づけに関わる新たな言葉が生まれたことからもうかがうことができる¹⁸。これに対応して 18 世紀後半にはいわゆる音読から黙読への移行が顕著になっていく。「書くことは言葉の乱用であり、ひとりで黙読することは談話の悲しい代用にすぎない。」¹⁹ これは 18 世紀後半の文芸状況についてのゲーテの批判的な言葉であるが、ヘルダーが目指す三重の変換ものこのような時代状況を踏まえてのことだと考えられる。

5. 異質性

ヘルダーがオシアン詩のデニス訳を批判した背景には、古典古代の形式を絶対化する文芸観への反発がある。古典古代の詩のあり方を唯一の規範として、その規則に当てはまらない詩を無価値なものとして退ける傾向に対して、さまざまな時代や地域に独自固有の価値を持った詩があることに注意が向けられる。ヘルダーの『民謡』には、彼自身が翻訳したものとして、イギリス、スコットランド、ドイツ、スペイン、フランス、イタリア、スカンジナビア、リトアニア、ラトヴィア、エストニアの歌が収められている。注意すべきは、それらがギリシア・ローマの古典古代の文芸伝統から外れたものであり、古典主義的な規範から逸脱するという意味で、異質なものの提示だということである。シュトゥルム・ウント・ドラング運動では、ギリシア・ローマとは異なるシェイクスピアをはじめとした北方世界の発見がなされたと言われる。だが、この運動の意義はそれだけではなく、少数民族の歌謡を積極的に翻訳することを通して、各地域文化に根

¹⁸ Vgl. Jacob und Wilhelm Grimm: *Deutsches Wörterbuch*. 33 Bde. Leipzig 1854-1971.

¹⁹ *Goethes Werke*. Hamburger Ausgabe in 14 Bänden. Hrsg. von Erich Trunz. Zwölfte, durchgesehene Aufl. München 1994. Bd. 9, S. 447.

差した固有の文学世界を提示し、古典主義的価値基準さらにはヨーロッパ中心主義的価値基準を相対化する点にも認めることができる。

おわりに

以上、主としてシュライアーマッハーとヘルダーの翻訳論を手がかりにして、18世紀から19世紀にかけての翻訳理論におけるいくつかの問題について考察した。シュライアーマッハーの言葉をもう一度取り上げよう。「言語は、異質なものももっとも多くの面で接触することによってのみ生き生きと成長し、固有の力を十全に展開できる。」(69) シュライアーマッハーは、「読者は、著者が別の世界に生き、別の言語で書いたことをつねに念頭に置いていなければならない」(67)と主張する。しかしその一方で、次のようにも述べている。

複数の言語を理解することではじめて、ある意味で人間というものが、また世界市民というものが形成されるのは多くの点で真実であり続けます。しかし、大事な点で祖国愛を抑圧してしまう世界市民が真実とは考えられないように、言語に関しても、一般的な愛は正しいものでも本当のものでもない、と言わざるをえません。(63)

シュライアーマッハーによれば、異質なものに開かれているということは、自己を失うことではなく、自己を広げ豊かにしていく必要不可欠な条件である。シュライアーマッハーが主眼を置いているのは、「外国の学芸のすべての精華と自国の精華とを言語において統合すること」(69)である。ヘルダーは、音色の議論との関連で次のように述べている。「多くの人が歌を愛するが、もっと多くの人が共に歌うことを愛する。それは聞く人を求め、さまざまな声と感情のコーラスを求めるのだ。」(FA III, 230) シュライアーマッハーとヘルダーの翻訳論において重要なのは、翻訳行為が内容の客観的な伝達という機械的な作業ではなく、異質なものを照らし出す発見的な行為として位置づけられていること、異質なものを知ることがより深く豊かな自己理解につながることでされていること、そして翻訳行為が他者との共存を探る契機になっていることである。そして見落としてはならないのは、言語間の非対称性において翻訳行為が豊かに展開すると主張されていることである。そこでは伝達よりも応答・対話が問題となっている。応答・対話の場では、答えが固定化されることはない。翻訳は、異質なものの豊かな解

積可能性を示す決して終わることのない営みとして位置づけられているのである。